

## 義務教育学校における9年間の成長を見据えた児童生徒会活動の展開 — 児童生徒のあこがれと責任をしなやかに積み上げる指導を通して —

水川和彦 柘植良雄 高木良太  
岐阜聖徳学園大学教育学部 白川村立白川郷学園

Development of student council activities with a view to help students  
mature in grades 1-9 at compulsory education schools:

Flexibly providing instructions which will be used for building aspirations and  
a sense of responsibility in students

Kazuhiko MIZUKAWA, Yoshio TSUGE, Ryouta TAKAGI

キーワード：義務教育学校 あこがれ 役割と責任 結トーク SLP

### I. はじめに

#### 1. 新学習指導要領が目指すもの

特別活動は、「集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して『人間関係形成』『社会参画』『自己実現』にかかる資質や能力の育成」<sup>1)</sup>を目指している。

学校が児童生徒にとっての一つの社会であると同時に、人間関係を学び、社会の一員としての基礎的・基本的な内容を学ぶ重要な場であることからすれば、義務教育9年間の学びを、これらの観点から今一度見直し、子どもの成長に軸足を置いた特別活動のグランドデザインを描き出してみることは極めて重要な作業であるに違いない。

#### 2. 義務教育学校という学びのシステムと白川郷学園

白川郷学園は、学校教育法の改正により、平成28年度から全国で設置することが可能になった完全小中一貫教育を推進する義務教育学校のひとつであり、今年度で開校3年目となる。したがって、小学校6年間+中学校3年間という発想ではなく、義務教育9年間を通して、児童生徒の発達段階に即した一貫教育が可能となる特徴を持つ。

日本の大半の学校は、小学校6年間、中学校3年間を節として、入学～卒業までの発達段階に即した教育を展開している。それ故に、小学校でいうなら、高学年となる5、6年生が「学校のリーダー」としての役割を求められることは当然であり、日本中の小学校では、6年生を頂点とした特別活動が展開されている。しかし、中学校に入ると今度は、せっかく磨いたリーダー性の発揮ではなく、フォロワーとしての立場を再体験して中学校の学びを展開することになるのが現実である。

しかも、この6・3制の「節」は、「制度」があるからの「節」であり、人間の連続する社会性発達の視点からすれば、6年生（12歳）という時期が本当に必要な「節」であるかどうか、丁寧に吟味されることは少ない。

そこで、特別活動の指導に当たって、当然のごとくデザインされた6+3という発想を、9年間一貫として展開することによって、もっとしなやかで確かな「自発的・自治的能力」が育てられるのではないかと考え、本実践研究を展開することにした。すなわち、中1ギャップと呼ばれるような小中学校の文化の違いを強烈に体感する必要のない義務教育学校において、児童生徒の集団性の発達の視点から再構成し取り組んだのが、本研究である。

### II. 実践研究の方法

#### 1. 義務教育学校における児童生徒の集団性の発達の明確化

新学習指導要領では、特別活動の目標を整理し、指導する上での重要な視点として「人間関係形成」

「社会参画」「自己実現」の3つを挙げている。よって、本実践研究においても、この3つの視点を踏まえて、児童生徒の集団性の発達の視点から9年間の成長を描き、それに基づく特別活動（児童生徒会活動）の在り方について検討をしていく。

## 2. 研究対象とする児童生徒会活動の重点化

本研究においては、児童生徒の集団性の発達をふまえ、児童生徒会活動のグランドデザインを描き、新しい自主的・自治的な活動の開発に取り組む。具体的には、児童生徒会としての年間の活動のうち、下記の3点について重点的に述べるものとする。

- (1) 委員会活動における取組（執行部および各委員会主導の取組）
- (2) 学年の活動における取組（白川郷学園リーダープロジェクト<SLP>）
- (3) 結（ゆい）クラス（異年齢たてわり集団）における取組

## 3. 研究の進め方（平成29年4月～平成31年3月）

- (1) 義務教育学校における9年間の児童生徒の集団性の発達と指導の重点を描く。
- (2) 児童生徒の「あこがれ」と「責任」を積み上げる児童生徒会活動の全体構想を明確にする。
- (3) 9年間の児童生徒会活動の全体構想を明確にし、重点とする活動、特色ある取組を展開する。
- (4) 児童生徒への意識調査をもとに、よりよい児童生徒会活動の在り方について検討する。

## Ⅲ. 実践

### 1. 義務教育学校における児童生徒の集団性の発達の明確化

本校は開校した平成29年度は、4-3-2システムによる運用を行っていたが、1年間の教育実践を再評価し、4-2-3システムへと変更した。これは、中1ギャップが、小学校から中学校への進級に問題があるわけではなく、中ブロック（5・6年）における集団性の発達を踏まえた指導と、自我の芽生えへの対応こそが重要であることを踏まえ、同時に、教職員の人事異動（大半の教職員が6・3制の学校勤務）にも鑑みて、しなやかな成長保障の構想を描いたことによる。この構想のもと、9年間の指導のステップを描いたものが図1である。成長・生活・学び・思考を例に9年間の成長を描き出したが、実質的な成長の節は、視点によっても、また、個々の成長によっても違うことは明らかであり、これは、発達特性を踏まえた9年間一貫指導の指標となるものと考えている。

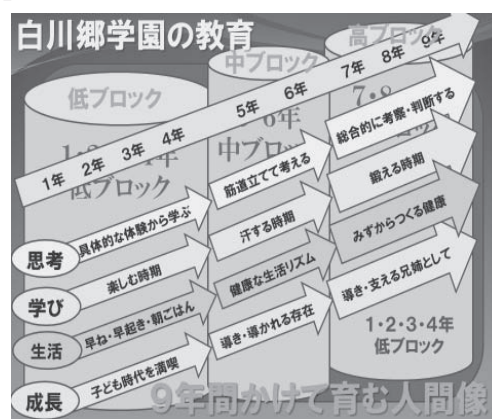


図1 9年間かけて育む人間像

表1 9年間の発達の特質をふまえた指導の系統

	低ブロック			
	1・2年	3・4年	5・6年	7・8・9年
<b>人間関係形成</b>	○みんなと一緒に活動する楽しさを体感させる時期 ・友達と一緒にやったほうがもっと楽しいことを体験を通して気付かせるようにしていく。 ・他者の気持ちや感情を理解したり、他人の立場を認めたりすることができるようにしていく。	○集団感情や集団意識が高まり、集団におけるリーダーが誕生してくる時期 ・集団に対する強い関心や興味を大切にしてい、進んで活動させ、楽しく豊かな生活を創り出すことができるようにしていく。 ・活動の中でおきる様々なトラブルを乗り越える方法をきちんと教えるようにさせていく。	○集団の活動目標や活動の質そのものに目に向くようになり、仲間と力を合わせやきることができるようになる時期 ・集団におけるリーダーとフォロワーの役割が明確になることから、自分の立ち位置を意識できるようにしていく。 ・相手の短所を受容したり、失敗を克服したりする寛容さを育てるようにする。	○集団活動の意義を理解し、より質の高い集団活動のために貢献することができるようになる時期 ・活動の本質を見抜き、目的をもって協力して課題を解決できるようにしていく。 ・一人一人のよさに着目し、そのよさが生きているような人間関係の構築に着目できるようにする。
<b>社会参画</b>	○リーダーや教師の指示に従い一生懸命活動することができる時期 ・集団の枠を、だんだんと広くしていくことで適応する力を段階的に身につけていく。 ・教師や上級生があたたかく見守ることで、安心して活動できるとともに、リーダーの存在があこがれるようにしていく。	○小集団を中心にして、自分たちが集団をつくったり、そのルールを決めたりするなど集団そのものが自己の安定を生む時期 ・集団にはルールがあり、それを守ることの大切さや破ることの影響を自覚できるようにする。 ・解決策を自分たちの納得いくまで考えさせていくことで、自尊感情を高めていく。	○自学年だけでなく、異学年をも含めた集団の高まりに着目して努力できる時期 ・学年にとどまらず、学年や学校全体を束ねていく意識が持てるように、目的や方法を明確にして根気強く取り組ませる。 ・小さな役割であっても、大きな取組の一翼を担うことを意識して取り組むことができるようにしていく。	○異年齢の集団を導き、目標を達成する喜びを味わう中で、より広い視点で貢献できるように取り組んでいく段階。 ・人と人のつながりに目を向けて、社会の中での責任を果たす生き方に目を向けられるようにする。 ・個々の内面をより確かにつかみ、集団に積極的に関与しようとする態度を育てられるようにする。
<b>自己実現</b>	○自分のやりたいことや楽しいことを仲間と力を合わせてできるようにしていく時期 ・がんばったからできた（成功した）という意識を高めるようにしていく。 ・自分の仕事の頑張りが、みんなの喜びにつながっていくことを体感させるようにしていく。	○自分らしさに気づき、自分らしさを高めていく時期 ・集団の一員として果たす責任の重さを自覚できるようにしていく。 ・上級生や大人に憧れ、自分たちで暮らしをさらに高めていく工夫ができるようにしていく。	○下級生を導く大変さとともに、集団を引っ張っていく喜びを味わう段階。 ・集団における自分の立ち位置を自覚し、目標達成のための貢献の喜びを味わうことができるようにしていく。 ・下級生をはじめとする異年齢との協力について意識できるようにしていく。	○自分のよさに気付く、さらに自分のよさを生かしながらよりよい自分を目指していくこととする段階。 ・自らの役割を意識し、集団のために何ができるかを考えながら、その一翼を担う喜びを感じることができるようにする。 ・社会に対する貢献の価値に気付く、進んで社会に働きかけるようにしていく。

さらに、9年間の人間の「成長」を、特別活動の「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の3つの視点に、当てはめて描き出したものが、前頁の表1である。<sup>2)</sup>

以下、これらの考えをもとに、義務教育学校において児童生徒会活動をどう展開していくのかを示す。

## 2. 児童生徒の「あこがれ」と「責任」を積みあげる児童生徒会の取組

### (1) 児童生徒会活動の構え

1年生から9年生までの学校生活が連続し、生活文化が共有できる学校には大きな特徴とともに、強みがある。その一つが、「いつでも自らの9年先を描き、いつでも9年前を振り返ることができる」環境にある。これは、同時に「上級生に常に憧れをもちながら、9年間をかけてリーダー性や自治能力（責任感）を磨き上げていくことができる」ことをも意味している。

例えば、通常の「6・3制」の中では、小学校の6年生は、最高学年である。学校リーダーとしての姿勢、委員会等での企画・立案など、全校のリーダーとして活動することを要求される。しかし、本校の6年生は前期課程のリーダーとして活動しつつも、全校リーダーの9年生の姿を常に見ることができる。全校のリーダーとしての活動は9年生に任せながら、自分たちは前期課程への伝達者としての役割や9年生のフォロワーとしての役割を果たしていく。

このことは委員会活動でも同様である。通常は5・6年生で委員会を組織するため、わずか2年間でリーダーとしての活動を要求される。しかし、本校の委員会活動のシステムは、5年間かけてリーダーを育てる。委員会に所属しながら、フォロワーとしての楽しみや、中間層としての意識を感じ取り、様々な手本に触れながら、まさにゆっくりと、リーダーとしての責任を自覚していく。これこそが義務教育学校の最大の強みであると考えている。

以下に示す実践は、義務教育学校である本校のメリットを最大限に生かし、児童生徒のリーダー性や責任感を、1～4年生は「参加」、5・6年生は「協力」、7～9年生は「貢献」をそれぞれ核として、9か年かけてしなやかに育成していこうという意図をもって企画・実践したものである。

本校の児童生徒会活動の全体構想を図2に示す。

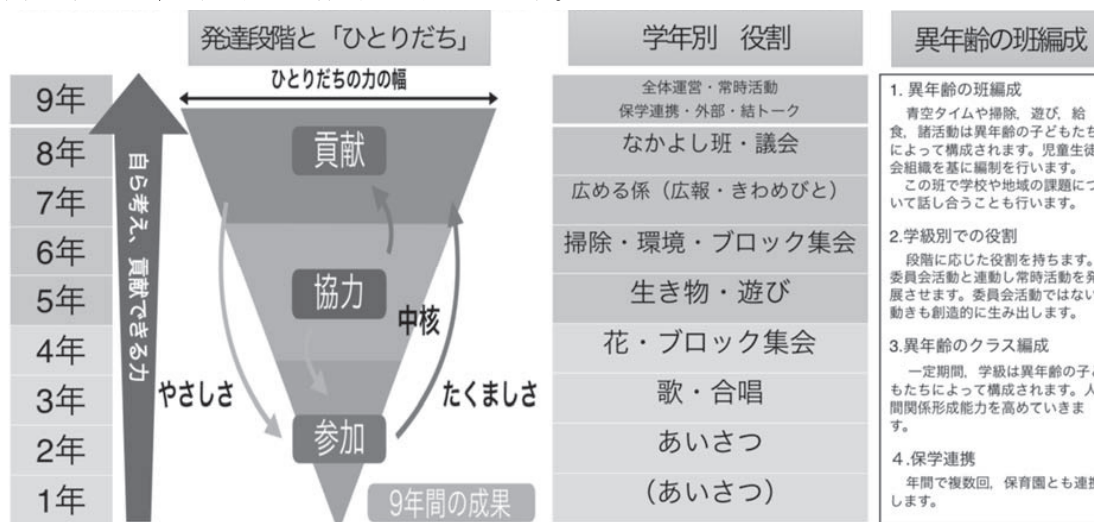


図2 白川郷学年の児童生徒会活動の全体構想

### (2) 児童生徒会活動の実践

本校の児童生徒会活動は次の3つの活動を大きな核としている。

#### ① 委員会活動

##### i) 委員会の編成と目的

通常、小学校では、委員会活動は5・6年生が行い、中学校では全学年で行うが、義務教育学校である本校では、5年生から9年生が委員会に所属し、それぞれの学年の発達をふまえた役割を担いながら話し合いに参加している。特に5・6年生に求めた役割は、前期課程（1～6年）への伝達である。委員会の場面において5・6年生は、高ブロックの生徒が企画・立案する内容を、前期課程のリー



ダーという立場で理解・吟味し、修正していく役割を担っている。

5・6年生と9年生では発達の段階も大きく違うが、9年生は5・6年生に分かるように活動を提案すること、5・6年生は9年生の提案を理解し下学年に伝達することが求められる。この2段階の連携を通して、徐々にリーダーとしての意識を高めていくのである。

#### ii) 全校が参加する「執行部」による「ひとりだちプロジェクト」

本校の児童生徒玄関前には、図3に示す児童生徒会執行部の企画運営による「ひとりだちプロジェクト」のホワイトボードがある。このボードには、本校の4委員会の重点活動が記されており、全校の児童生徒は、毎朝、自分が今日がんばりたいことを決め、ネームプレートを貼り意思表示をする。

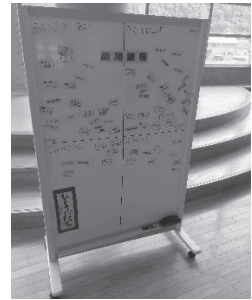


図3 ひとりだちボード

そして下校時には、自分の今日のめあてが達成できたかどうかを自己評価する。この活動は、全校の重点活動を全校に周知するために行われる。委員会に参加するのは5年生以上であるため、4年生以下には委員会の取組が伝わりにくい。そこで、全校の児童生徒が毎日通る玄関にボードを設置することで、委員会の取組を4年生以下の児童にも意識してもらおうと同時に、5年生以上にとっても、自分の委員会の取組がどの程度意識され、達成されているかを確認する指標にもなっている。

さらには、玄関で各委員が下級生に対して、ボードから得た情報をもとに、「一緒に頑張ろう」や「がんばっていたね」などの声掛けにより認め励ましていくことも日常化している。

#### iii) 発達段階に即した取組としての「生活づくり委員会」によるあいさつ運動

生活づくり委員会では、あいさつの活性化をめざして取り組んでいる。具体的には、あいさつで意識したいポイントを3つ挙げ、重点的に取り組むことで全校のあいさつを活性化しようと考えた。従来のあいさつのポイントは「あ・じ・め」とよばれ、「明るい声・自分から・目を見て」の3つがポイントであった。



図4 朝のあいさつ運動

しかし生活づくり委員会での話し合いにおいて、前期課程と後期課程では、目指すべきあいさつが違うのではないかという意見が委員から出た。そこで5、6年生と

7、8、9年生に分かれて話し合った結果、それぞれに違うポイントをあげた。前期課程は「目を見て 明るい声 スマイル」であったのに対し、後期課程では「自分から 目を見て 場に応じた」と変わっている。このよに、児童生徒会活動では、9年間であるが故の、活動目標の発達を踏まえた設定なども、子どもの自発的な活動から生まれてくるメリットをもっている。

#### iv) 全校ランチタイムを利用した「健康づくり委員会」の全校への意識啓発の取組

健康づくり委員会では、図5のように毎月19日の食育の日にあわせて、食に関する豆知識を紹介している。季節に応じて、紹介する食材を選び、栄養素や年中行事に関わらせた食べ方、食材にまつわるエピソードなどを発表している。給食時間に行う目的は2つある。1つは食事をしている時間帯なので、食に関する意識が高まっていること。もう1つは、全校がたてわり班ごとに座って給食を食べているため、全校に一斉に伝えることができ、上級生が下級生に教えたり、一緒に考えたりする場面をつくれることである。



図5 全校給食時のよびかけ

発表する委員たちも、クイズ形式にしたり、写真や絵を用いたりして分かりやすくする工夫をしており、食に関する情報を知り、食を通じた健康への意識を高めることができている。

② 発達段階に即してリーダー性を育てる「白川郷学園リーダープロジェクト (SLP)」

本校では、今年度より、白川郷学園リーダープロジェクト (以下 SLP) とよばれる活動を行っている。これは、各学年を「〇〇リーダー」に任命し、活動の企画・運営を任せる取組である。各学年をリーダーに任命し責任をもたせることで、低学年のうちから徐々にリーダー性や責任感を育てていくことができると考えた。さらに学校行事においても各学年に役割をもたせることで、学園の諸活動の活性化も図ることができると考えた。

これらは、担当教員のみで考えるのではなく、児童生徒会執行部とともに、各学年の役割を協議し、右の表3のような役割を決定したものである。以下、いくつかの各学年の特徴的な活動について述べる。

表2 白川郷学園 SLP

学年別 役割	
9年	全体運営・常時活動 保学連携・外部・結トーク
8年	なかよし班・議会
7年	広める係 (広報・きわめびと)
6年	掃除・環境・ブロック集会
5年	生き物・遊び
4年	花・ブロック集会
3年	歌・合唱
2年	あいさつ
1年	(あいさつ)

i) 3年生の全校合唱の取組

6月中旬に3年生が「コーラスリーダー」として、全校合唱のイベントを計画した。結クラスで同じ曲を練習し、全校集会で歌う。その様子をビデオ撮影し、歌の作者に届けようというものであった。3年生は歌詞の印刷やCDの準備だけでなく、事前に歌を練習し、結クラスでの練習時には率先して大きな声を出すことができた。



図6 3年生のコーラスリーダー活動

3年生は、前期課程でありながらも、その活動の具体性と他学年の協力のしやすさから、貢献しているという自覚を高めることができたと考えている。SLPは、低学年のうちから発達段階に即し、活動を企画・運営する力や責任感を段階的に育てることができる活動である。もちろん、背景に、合唱に力を入れる後期課程の8年生が全面的にサポートし、活動を陰で支えるという2重のしくみを生かしてこそではある。

ii) 6年生による全校たてわり掃除の取組

6年生は「クリーンリーダー」とした。毎日行われる清掃の時間を担当し、計画会や反省会の運営を行うことがおこなった仕事である。さらに、今年度より清掃活動を結クラスで行う計画があったため、結クラス掃除の是非も含めて検討することとした。担当の6年生は全校にアンケートをとったり、話し合いを重ねたりして、たてわり掃除を行うことを決定した。

その後、9年生と協力しながら、掃除場所の割り振り、役割の分担などを経て、6月中旬よりたてわり掃除を開始することができた。これら、全校が取り組む日常活動を、9年生の力を借りながら6年生が担当することで、全校を見届ける姿勢や企画していく力を養うことにつながった。

iii) 7年生による広報活動

7年生は「広めるリーダー」として、学校行事や児童生徒会活動等の「広報活動」を担っている。具体的には、定期的な新聞発行や校内掲示物の作成などに取り組んだ。1年生を迎える会では、1年生への取材や写真撮影などを行ったり、各学年の行事でも情報を収集し取材を行ったりするなど、報道・広報の活動に取り組んだ。発行日より逆算した取材や編集日程の調整、記載内容の吟味など、視野を広くもち、全校を見て動く姿勢や、先を見通して動く力などを身につけている。

iv) 行事における役割分担

学校行事において、各学年に発達段階に応じた役割を割り振ることは、一人ひとりが「参加」「協力」「貢献」を意識して行事に臨むことにつながり、行事を通じた責任感やリーダー性の育成が図れると考えた。例えば、4月に実施した『1年生を迎える会』では、あいさつを2年生、歌を3年生、

会場に並べる花を4年生、たてわり班遊びを5年生、前日準備と掃除を6年生、写真撮影・記録を7年生、運営補助を8年生、歓迎の劇や運営を9年生のように、執行部と実行委員会の企画のもと各学年が集団性や自治能力の発達に即した活動を責任をもって役割を果たしたことで、充実感や達成感を味わうことが出来た。

### ③ 結（ゆい）クラス活動

本校には「結クラス」とよばれるたてわり班がある。異学年集団による活動は、小学校で多く見られるものであり、中学校ではほぼ存在しない。しかし、本校は義務教育学校であるため、1年生はもちろん、後期課程の7～9年生までもが結クラスに参加している。この9学年でのたてわり班「結クラス」が、本校の大きな特色の一つである。オランダのイエナプラン<sup>3)</sup>を参考に、本校でもこの異年齢集団による自治能力の育成に取り組んでいる。

#### i) 結クラスの目的及び編成

通常、学級は同年齢で編成される集団である。しかし、現実社会での活動はほぼ異年齢集団による活動であり、ソーシャルスキルも異年齢での対応能力を指す。その現実社会を模擬的にでも再現し、異年齢集団の中で様々な活動を経験させようとしたのが結クラスである。これまでは「なかよし班」という名称で、主に遊びをするための集団であった。本年度は遊びの枠を超え、異年齢集団の中でさまざまな出来事を経験することにより、現実の社会に近づけ、人間関係形成力を高めていってほしいと考えた。

編成にあたっては、9年生の生徒数に合わせ12班とした。そして、男女の比を考慮しながら班編成を行った。結クラス編成の中心になったのは児童生徒会執行部で、兄弟関係や人間関係はもちろん、互いを知るからこそ、給食を食べる早さまで考慮する念の入れようであった。

こうして作られた結クラスでの具体的な活動内容について、以下に述べる。

#### ii) 結クラス遊び

毎週水曜日の休み時間に、結クラス遊びが行われる。プレイングリーダの5年生が、前日の帰りまでに遊びの内容、場所を掲示板に記入する。そして1～9年生が共に遊んで過ごすのである。

遊びと言いながらも、各学年の役割は少しずつ違っている。5年生は企画・運営を行うリーダーであり、1～4年生は文字通り遊びに全力で「参加」する。6年生は5年生の運営が円滑にいくように協力し、7～9年生は5年生に達成感を味わわせるために陰ながら支えている。こうして遊びを通して責任感やリーダー性を育てていくことができる。

#### iii) 結トーク

結クラスの活動は、遊びばかりではない。本校では図7に示すように、「結トーク」と名付けられた話し合い活動がある。委員会のキャンペーン活動や、学校生活での悩みなどについて、1～9年生までが、同じグループで話したり相談したりできるピアサポートの活動である。

学園リーダーである9年生がリーダーとなりメンバーはそれぞれの思いを話していく。同一学年の話し合いでは思いもよらない視点から、低学年の児童が意見を言ったり、低学年にも分かるように話そうとすることで、問題の本質が見えてきたりすることが多くある。

図7に示すように、結クラス遊びで仲を深めているので、安心して自分の考えを話すことができることも、話し合いを成功させる要因のひとつにもなっている。

#### iv) 結クラスウィーク

本年度、結クラスを取組で最大の活動と位置付けているのが「結クラスウィーク」である。この期間は、朝登校すると結クラスごとに割り当てられた教室へ集合し、朝の会から休み時間、給食や掃除、帰りの会まで、授業以外はすべて結クラスで過ごす、いわば「イエナプラン型異年齢学級」である。

この取組には、次のような効果を期待した。



図7 縦割りで語り合う結トーク



- ・異年齢集団での生活を通して、仲間を思いやる心情の育成を図ること。
- ・9年生をはじめとする後期課程生徒のリーダー性を伸長させること。
- ・結クラス内でのSLP活動で、一人ひとりがリーダーとなるため、責任感が育成できること。
- ・仲間同士でのトラブル解決や悩み相談など、ピアサポートの充実を図ること。
- ・学校に通うのが楽しい、結クラスの仲間と過ごすのが楽しいという思いをもたせることで、欠席や保健室利用を減らすこと。

第1回の結クラスウィークは、6月10日から14日までの5日間で実施した。9年生がリーダーとなり、自分たちの班の一週間をプロデュースしSLPをもとに役割を振り分けたり、班の掲示物を作成したり、全員で図書室へ通ったりと、班ごとに趣向を凝らした取組を行うことができた。

右に示すのは結クラスウィーク実施後に全校に行ったアンケート結果である。

この結果からは、評価の平均が全校で4.3と高かっただけでなく、全校合唱やひまわりの種まき、たてわり掃除や結クラス遊びなど、SLP活動に対する楽しみや充実感など、評価が高かったことが伺える。

表3 各学年の評価結果 (n=116)

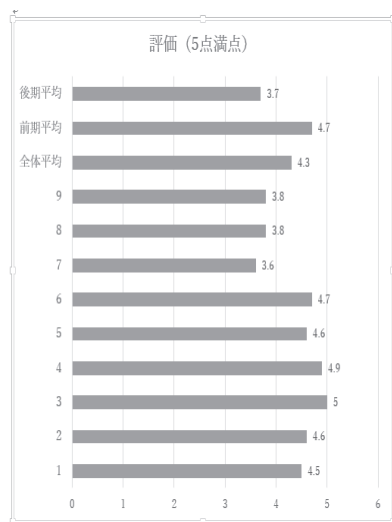


表4 各活動の評価 (n=116)

- よかった活動 (複数回答)
1. 結クラス遊び・・・66人
  2. 朝の会帰りの会・・・54人
  3. ひまわりのたねまき・・・51人
  4. たてわりそうじ・・・40人
  5. 明日を信じて(合唱)・・・36人
  6. 結クラス発表会・・・34人
  7. 昼休みの活動・・・23人
  8. たてわり給食・・・22人
  9. 結トーク・・・11人
  10. その他
    - ・プラカードづくり：2人
    - ・あいさつ：1人
    - ・菌みがき：1人

(4) 実践のまとめ

ここまで委員会活動、白川郷 SLP、結クラスの3つの活動実践について述べてきたが、白川郷学園の児童・生徒会活動は縦糸と横糸の関係であるとも考えている。縦の糸は結クラスであり、委員会である。学年の枠を超えて共に活動し、あこがれと責任感を醸成する。横の糸はSLPである。同年代の仲間と活動を吟味し、企画・運営を行うことで自発的・自治的な能力が高まっていく。この縦横の関係強化こそが児童生徒会活動の根幹であり、義務教育学校でこそしなやかに育てることができる力であると感じている。

IV. 成果と課題

本実践を通して次のような成果と課題が見えてきた。

- 1 「人間関係形成」の資質や能力を育てるためには、異年齢集団を、児童生徒の発達段階をふまえて、「あこがれ」の意識が高まるように仕組むことが効果的である。

従前の小学校文化・中学校文化という枠を超えて、9年間一貫の強みを生かし異年齢集団で活動させることにより、上級生への「あこがれ」をエネルギーに、最長9年先という長いスパンでの自らの未来像を描くことが出来ることが見えてきた。とりわけ、生徒会執行部がマネジメントする「ひとりだちプロジェクト」は、常に上級生や下級生の想いや願いが共有化できることから、安心感とともに自治に対する見通しを持つことに繋がっていると感じる。

- 2 「社会参画」の資質や能力を育てるためには、「集団における自分の立ち位置」と「責任」を自覚させることが大切である。

本校では、夏の中体連壮行会でさえも、全校で参加させている。1年生にとっては部活動の経験

もなく、感極まって泣く先輩の姿が奇異にさえ映ることは少なくない。しかし、その1年生も次年度には、後期課程の感動を共に味わえるようになってくる。さらに3・4年の児童には後期課程に始める部活動へのあこがれ、5・6年の児童には、具体的な部活動への期待というように、社会参画には、気づく・楽しむ・なれるといったステップがあることも見えてきている。本実践で取り組んだ、SLPも、自学年の発達段階を自覚させたり、9年間の長いステップにおける自学年の立ち位置に気づかせたりするうえで実に効果的であった。また、各学年の取組に対する多学年のサポートや協力にも、自分たちの立ち位置を自覚できるような機会が多くあり、自発的自治的な活動の有効な視点となるものと考えている。

### 3 「自己実現」には、発達段階に応じた、柔軟で切れ目のない「自己肯定感」の積み上げが必要であることが見えてきた。

本校で取り組む「結クラス活動」は、大切なピアサポートの場となっていると考えている。下級生にとっては、上級生の包容力とでもいうべき安心感が、大きな教育効果を生んでいる。とりわけ、「〇〇さんの悩みは、僕も前あったよ。」とか「～なところが、〇〇さんのよさだね。」という励まの言葉は、教師の価値づけの言葉とは少し違う意味付けとなる。つまり、上級生の励ましは、「未来の自分」からの励ましでもあるということである。

また、今回実施した結クラスウィークの取組は、オランダイエナプランをヒントに試行実施したものであるが、多くの新しい自治活動のヒントを得ることが出来たものと考えている。

結クラス及びSLPの取組がリンクし、児童生徒の自己肯定感は「満足感」として自覚されていることは前述したとおりである。下級生の満足度に比べ、後期課程の満足度がやや低いことも、異年齢集団の中での責任を大きく自覚しているからではないだろうか。

最後に、結クラスウィークの欠席及び保健室来室状況は、昨年度との比較で、「欠席46%減（15人→8人）、保健室来室21%減（62人→49人）」と、一定の効果があった。上級生が下級生のトラブル解決や悩み相談などに対応するピアサポートの動きがあったからこそ、このような成果が見られたのだと考えている。

## V おわりに

異年齢集団での活動、そして、9年間を児童生徒の連続した成長の過程ととらえ、憧れと責任で育て上げていく手法は、人間関係形成力の育成にある程度の効果があることは分かってきた。しかし、結クラスをはじめとする取組のゴールはまだ先にあると考えている。目標の一つが、白川郷学園版「イエナプラン教育」の創造である。「イエナプラン教育」とは、子どもたちをグループで活動させることでお互いが異なる存在であることを知り、共に生きることの大切さを学べるように促す教育方法である。今後は、道徳や学級活動などを結クラスで行い、これまで以上の人間関係形成力の育成をめざしたいと考えている。義務教育学校だからこそ見えてくる、子どもの成長に即した取り組みを一層具体化していきたい。

## 注・文献

- 1) 文部科学省（2017）：小学校学習指導要領解説 特別活動編，文部科学省，11.
- 2) 加納小学校（2010）：加納小学校の学級づくり「第2版」，岐阜市立加納小学校 を参考に、白川郷学園版として構築。
- 3) イエナプラン オランダを中心に実施されているオルタナティブ教育。異年齢クラス編制、4つの基本活動（会話、遊び、仕事、催し）の重視、インクルシブのシステムなどに特徴がある。